様式２

平成２９年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

学校名　　静岡県立伊豆中央高等学校

校長名　　星　野　義　文　　印

Ⅰ　スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
Ⅱ　マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
Ⅲ　スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
Ⅳ　日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
Ⅴ　スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

１実践テーマ	【　Ⅰ・Ⅲ　】
２実施対象者	静岡県立伊豆中央高等学校　生徒　613人
３展開の形式	（1）学校における活動 ① 教科名　（　体育　　） ② 行事名　（オリンピック・パラリンピック教育講演・交流会） ③ その他　（　　） （2）地域における活動 ① イベント名（　　） ② その他　（　　）
４　目　標 （ねらい）	パラリンピックアスリートとの交流を通して目標を持ち、努力することの大切さに改めて気付くとともに、自己に置き換え、今後の人生の生き方を見つめなおす機会とする。また、高いオリンピズムを感じ、挑戦や努力することの大切さや、国際的な視野、共生などを学び、社会貢献できる人材を育てる機会とする。
５　取組内容	①事前学習の授業等を通して、オリンピック・パラリンピックの歴史、競技種目、ルールやアスリートの努力、苦悩、生き方に関する内容を取り入れる。 ②　パラリンピアン講演・交流会の開催。

6　主な成果	どの分野でもトップで活躍している方との触れ合いは、生徒のさまざまな興味を引き出してくれるきっかけになりやすいと感じた。 ・同じことを続けていくための(引き出し)モチベーションのあげ方がためになった。 ・車椅子バスケのルールを聞いて、他種目はどのようなルールになっているのか興味が沸いた。 ・事前の指導もあったが、映像で見るのと生で見るのはスピード感が違って伝わるものがあった。 ・自己実現力とモチベーションとの葛藤が聞けてよかった。 ・障がい者に対するかわいそうといった感覚がなくなった。 ・同じように立ったり(義足)話したりでき、健常者と大差がないと感じられた。 ・話を聞いて事故は身近にあるため、義足になることも可能性としてある。そう感じると障がいが身近に感じられた。 ・選手と出会ったことで、応援する気持ちが芽生えた。知っている人や会ったことがあるだけで競技への関心がまったく違う。
7実践において工夫した点（事業の特色）	事前指導をきちんと行ったこと。 種目の説明や理解。映像で見せること。オリンピックとはどういう経緯で始ったのかの概要等。
8主な課題等	行事として組み込むため、時間の調整であったり時間の確保が難しかった。 国⇔県⇔学校⇔選手の連絡で、一番板ばさみにされたのが学校であること。 もっとスムーズに話を通してほしい。 金銭的な話はこちらがするのではなく、きちんと国か県が間に立つべき！そこがいくら出せるのかは相手がプロなのできちんとすべきだと思う。知人伝手にお願いしたので、対応の遅さに私が申し訳ない気持ちでいっぱいだった。 こうした機会は、生徒にとっていい経験になると思う。
9来年度以降の実施予定	来年度は、インターハイ自転車競技の高校生活動中心校であるため、この経験を生かして、オリンピック、パラリンピックの自転車競技に関する理解・観戦応援あるいはボランティアスタッフへと繋げていきたい。